

私の見たモザンビーク

土佐市民病院看護婦 松本 麻也子

飢饉に瀕する村落

首都マプトには食物があふれている。しかしそこから車で五、六時間も行ったある村は飢饉に瀕(ひん)していた。

シヨク工興北部のチブタ二村。五年ほど前からの氣象変化で主食のトウモロコシが実らず、番えの木の実を食って飢えしのんでいた。このまままた二千人が餓死する恐れがあるといふ。

この村には広い土地があり、大きな川が流れている。ポンプもえあれば川の水をくみ上げ、農業を再開するところができる。しかし政府からはそんなさきやかな投資も、食糧援助も届かない。私はこの村に友人が寄せてくれたせんべいついで種を買った。あとにポンプを設備して種をまき、来年の収穫を期待しよう。

住血吸虫が流行

シヨク工から車で約二時

極度の貧困にあえぐ 浄財生かし井戸掘り

た二百人のうち四割が感染していた。
原因は川の水だ。水浴びや排尿をし、五、離れた村



シヨク工興マシンジール村の小学生と松本さん。どの子も元気が明るかった



ままだ公衆衛生の知識もないから、感染の悪循環を繰り返している。が。

私たちはこの村に井戸を掘ることに。土佐市民病院の同僚や市民の方々が結成してくれた「モザンビークに医療品を送る会」(近沢美和会長)から借かった四十五万円をこの資金に充てることにした。

「これで村の人が救われるといいね」。私は土佐市の仲間や浄財が生きた援助に感謝するところであつた。

チャオ また会おう

現地を見学したのは公衆衛生の知識、設備の普及が必要だ。そこで、すべてが貧困から生まれていると言つても過言ではない。そして、医療以前に生命をつなぐための食糧をどう確保するかという問題を解決しなければならぬ。

その村を去る最後の日。数人の子供らが手を振りながら私たちを追いかけきてくれた。その笑顔が私には忘れられることはないだろう。

「チャオ」(はいはい)、「また会おう」

間のシヤンクレーネ村は、血漿や発熱などの症状が出る住血吸虫が流行。診察している。水を煮沸する燃料の

まで歩いて水を運び、飲み、私と吉田修医師(左)は村長の案内でその川へ。地帯